

今年は5月1日、2日の両日が休校となったおかげで8連休。広い野原に「ほら好きなように遊んでごらん。」と突然放り出された子どものような状態で何をしようかと思っているうちに無為に日が過ぎ日常生活に帰還しました。

30年以上も前の教え子たちの同窓会2つに顔を出し、「負うた子に教えられ」を今更ながらに実感。それぞれがいい中年のおじさん・おばさんに変身して、子どもの自慢に愚痴、日々の事柄から政治への不満・不信にいたるまで endless。

「首相がオバマ大統領と会談して、“日米の絆が深まった”とコメントしてたが、絆という言葉の重みが分かってません。先生どう思われますか？」ある調査では大阪の幸福度は全国順位でブービー即ち最下位から2番となっていますが、卒業生を見ていると、何の大阪人の生命力は大したものではと思わされました。

ちょこちょこ私事をかたづけ、連休の半分以上をTVと新聞のお守り、いやお守りをしてもらいながら見つけたいいニュースを1つ。

「子どもの貧困 教育で救う」「先生は学生、無料塾や相談」の見出し記事

資本主義とは、より多くの富を生み出すと同時に富の偏在を前提とするシステムであり、格差を生み出すことをその本質とするとの定義に当て嵌めても、日本の子どもの6人に一人、推定323万人が貧困状態にあるとの推計を目の当たりにすると絶句。

そんな中、教育で貧困の連鎖を止めようと各地に学習支援の輪が広がりを見せているそうです。

滋賀県守山市で大学生のボランティア団体「アトラス」が活動を開始したのは4年余り前、厚生労働省によると、生活保護世帯の子どもに学習支援をする自治体はこの3年で7倍余の73自治体に増え、自治体以外にもNPO法人や民間団体が主催する学習支援が各地に広がっているとか。

アトラスのリーダーは、「子どもの貧困を知ってもらうことが第一歩。若者は気負わず支援している。貧困の連鎖をとめ、希望の連鎖に変えたい」と。

同窓会で顔を合わせた小学校の教員をしている教え子は、皆さまよくご存知の宮沢賢治の「雨ニモマケズ」を子供たちに暗唱させているそうです。

「・・・東に病氣ノコドモアレバ 行ッテ看病シテヤリ  
西ニツカレタ母アレバ 行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ・・・」

この人物、

「・・・アラユルコトヲ ジブンヲ カンジャウニ 入レズニ ヨクミキキシ ワカリ ソシテワスレズ」(補遺詩篇 雨ニモマケズ)

と、よく見聞きし、わかり、忘れない聡明さを持っています。外に自分をどうアピールするかには無関心でも、聡明にものごとを理解し、判断できる人物です。

「あらゆることを自分を勘定に入れずに」ということも大事なことでしょう。人間の悲しい性といえはそれまでですが、自分の利益という意識が入ってくると人間の目は往々にし

て曇り、正しい判断を下せなくなります。

アトラスのリーダーの言葉と、生涯に亘り「幸せとは？」を問い続けた宮沢賢治の詩が通底しているように思われてなりません。

そういえば、学生時代に読んだ、ロシア貴族の出で、地理学者でもあり、革命家でもあったクロポトキンの「相互扶助論」の中に次の一節がありました。「動物学や、人間に関する諸科学は生存競争という容赦ない法則をいつも強調している。しかしそれらは、相互扶助の法則と呼んでも良い別の法則のあることを忘れている。本来動物も人間も、自分たちが生きのびてゆくために、相互に結びつく術を知っている。」